

## 【研究ノート】

# 現代カンボジアにおける権威主義とポピュリズムの政治力学

——1970 年から現代における政治体制の変遷と権力構造の分析

千葉大学大学院人文公共学府人文公共学専攻博士後期課程

陳 コン

## はじめに

カンボジアの政治は、過去数十年にわたり激しい変遷を遂げてきた。1970 年にロン・ノル将軍によるクーデターでシハヌーク政権が崩壊した後、ポル・ポト率いるクメール・ルージュ政権、ヘン・サムリン政権、そして現在のフン・セン政権と、権威主義体制が続いている。これらの政治変遷の背景には、ベトナム戦争の影響、国連の介入、周辺国の地政学的圧力といった外的要因が大きく関わっており、権威主義体制が形を変えながらも繰り返し再構築されてきた。特に、ロン・ノル政権、クメール・ルージュ政権、ヘン・サムリン政権はいずれも暴力的手段によって政権を掌握し、カンボジアの政治において武力と強制力を基盤とした支配のモデルを形成した。

一方、ポピュリズムもまた、カンボジアの政治において重要な役割を果たしてきた。1970 年代のロン・ノル政権下で農民を称賛し、エリート支配を批判するポピュリズム的な思想が広がったが、クメール・ルージュ政権下で一旦抑制された。しかし、1990 年代に国連暫定統治機構（UNTAC）が介入し民主選挙が実施された後、サム・ランシーのようなカリスマ的指導者によってナショナリズムを基盤としたポピュリズムが再び復活した。2013 年の総選挙後には反政府デモが続き、ポピュリズム運動が勢力を拡大し、権威主義体制への挑戦が強まることとなった。

既存研究においては、カンボジアの権威主義体制やポピュリズムを個別に論じた研究が存在する。たとえば、Chandler（2007）はカンボジアの歴史的背

景を踏まえ、政治体制の形成過程を分析し、Tully (2005) は農村部の社会構造がクメール・ルージュの動員に与えた影響を指摘した。また、Morgenbesser (2014) はカンボジアを「覇権的権威主義体制 (hegemonic authoritarian regime)」として位置付け、フン・セン政権における制度的支配の安定要因を明らかにした。一方、ポピュリズム研究においては、Mudde (2004) や Kaltwasser (2017) が概念的枠組みを構築し、木之内 (2008) はフン・セン政権がヘリコプターで地方を訪問し、農民と直接交流することで「庶民的な指導者」としてのイメージを構築しつつ、選挙を「安定か混乱か」という二者択一の構図に単純化して有権者を動員する戦略を採用していることが指摘された (木之内 2008: 62-66)。

水島 (2024) は、近年の欧米におけるポピュリズムの台頭が「上」と「下」という社会的階層を背景に展開される傾向を指摘している。特に、右派ポピュリズムが移民問題や反グローバリズムを掲げて既存の中道勢力を脅かしている点や、アジア諸国においても同様に反既成政治・反エリートの動きが拡大している現象を強調している。たとえば、タイの前進黨の躍進やフィリピンのドゥテルテ政権、インドネシアのジョコウィ政権においても、庶民層を基盤とするポピュリズムの支持が権威主義的統治を支える構造が確認されている (水島 2024: 9-12)。

しかし、既存研究ではカンボジアの権威主義体制とポピュリズムがどのように相互に作用し、政治的ダイナミクスを形成してきたのかについて、包括的かつ体系的に分析した研究は限られている。既存研究は、権威主義体制またはポピュリズムのいずれかに焦点を当てる傾向が強く、両者の政治的相互作用が政権維持や政治的安定・不安定に与える影響についての詳細な検討は十分になされていない。要するに、フン・セン政権が2000年代以降に社会福祉政策やインフラ整備などを積極的に進めることでポピュリズム的支持基盤を強化し、それが権威主義体制の維持にどのように寄与したかを探る研究も不足している。

本研究の目的は、カンボジアにおける権威主義体制とポピュリズムの相互作用を歴史的および実証的に分析することである。特に、1970年のロン・ノル政

権によるクーデター、1975年のボル・ポト政権の成立、1993年の民主選挙、フン・セン政権の長期支配、そして2013年以降の政治的変動期という5つの時期を設定し、それぞれの時期において権威主義体制とポピュリズムがどのように相互に作用し、政治的安定または不安定をもたらしたかを検証する。これにより、カンボジアにおける権威主義とポピュリズムの関係の実態を明らかにするとともに、東南アジアにおける権威主義体制とポピュリズムの政治力学に関する比較政治研究に対して理論的知見を提供することを目指す。

### 世界的な権威主義体制の台頭とカンボジアの位置付け

現在、世界的に権威主義体制が拡大していることが指摘されている。エコノミスト・インテリジェンス・ユニット（EIU）が2023年2月15日に発表した「2023年民主主義指数（Democracy Index 2023EIU）」<sup>1</sup>によれば、世界人口の約39.4%が権威主義体制下にあり、59の国家が「権威主義体制」に分類されている。これらの体制では、選挙過程の不透明さ、政府機能の欠如、政治参加の制限、市民の自由に対する制約が顕著であり、統治の正当性を欠いた強権的な支配が特徴となっている。また、2023年の世界全体の「民主主義平均スコア」<sup>2</sup>は5.23と前年よりもさらに低下し、民主主義の後退が続いている。特に中東・北アフリカ（MENA）地域では、民主主義指数が3.23と過去最低を記録し、権威主義的支配の根深さが浮き彫りとなった。

権威主義の台頭にはいくつかの要因が考えられる。まず、経済的不安や社会的格差が民主主義の脆弱性を際立たせ、強力なリーダーシップを求める傾向が

<sup>1</sup> 「2023年民主主義指数（Democracy Index 2023EIU）」

[https://www.eiu.com/n/campaigns/democracy-index-2023/?utm\\_source=twitter&utm\\_medium=organic\\_social&utm\\_campaign=democracy-index-2023&utm\\_term=mea&utm\\_content=video](https://www.eiu.com/n/campaigns/democracy-index-2023/?utm_source=twitter&utm_medium=organic_social&utm_campaign=democracy-index-2023&utm_term=mea&utm_content=video)、2024年9月24日にアクセス。

<sup>2</sup> EIUの民主主義指数は、165の独立国家と2つの地域を対象に、以下の5つの指標で評価する：1. 選挙過程と多元性、2. 政府の機能、3. 政治参加、4. 政治文化、5. 市民的自由。各指標は0から10までスコア化され、総合スコアに基づき、各国は「完全な民主主義」「欠陥のある民主主義」「混合政治体制」「権威主義体制」のいずれかに分類される。

強まっている点が挙げられる。次に、ロシアやトルコのような権威主義的体制が安定や経済的發展を実現しているかのように見られ、それが他国における権威主義化を促進していることである。加えて、デジタル技術の進展により監視体制が強化され、市民社会に対する管理がより容易になったことも大きな要因である。

権威主義体制を理解する上で、Juan J. Linzの分析は非常に有用である。彼の著書『権威主義体制と全体主義体制(Totalitarian and Authoritarian Regimes)』において、権威主義体制を全体主義と民主主義の中間に位置付け、その特徴を以下の3点に要約している。第1に、「限定的な政治的多元性」があり、政党や利益団体の活動は制限され、政治的競争や多様な意見の自由な表出が抑圧されている。第2に、「体系的なイデオロギーの欠如」があり、権力の維持を目的とする非体系的な信条に基づくもので、これにより権力者の恣意的な支配が可能となる。そして第3に、「政治的動員の低さ」があり、市民の政治参加は意図的に抑制され、大衆の無関心が期待される (Linz 2000: 264-266) と考えられている。

Samuel P. Huntingtonも権威主義体制について重要な分析を行った。彼は著書『第3の波 (The Third Wave: Democratization in the Late Twentieth Century)』で、権威主義体制を経済的・社会的安定を提供する体制として位置付けている (Huntington 1991: 11-14)。この体制は民主化の波に対する反動として生じ、政治的統制の維持や経済成長、社会秩序の確立を目的とする。特に発展途上国においては、急速な社会変動による混乱を抑制するため、権威主義体制の正当性が強調される場合が多い。

一方、Larry Jay Diamondは権威主義体制と民主主義体制の中間に位置する「ハイブリッド体制」を提唱している。ハイブリッド体制とは、形式的な民主主義要素 (例：選挙) と権威主義的要素 (例：市民自由の制限) が共存する体制である。選挙は実施されるが、実質的な政治競争は欠如しており、体制の正当化手段として機能する (Diamond 2002: 20-23)。ダイヤモンドは、特に20世紀後半の第3の民主化の波以降、多くの国が完全な民主化を達成できず、この

ハイブリッド体制に移行したと指摘する（同上）。

こうした理論を踏まえると、権威主義体制は一様な形態を取るものではなく、社会的・経済的条件や歴史的背景に応じて多様な様相を示すことが理解される。近年、デジタル技術の進展やグローバル化の進行に伴い、その形態は一層複雑化している。では、現代カンボジアにおける権威主義体制は、いかなる類型に位置づけられるのか。本稿では、この点について検討を試みる。

カンボジアの政治体制は、「覇権的権威主義体制」という特性を帯びている（山田・新谷 2024: 2-3）。これは、ハイブリッド体制（hybrid regime）としても位置付けられており、民主主義的要素と権威主義的要素が混在している（Lee Morgenbesser 2014: 29-31; Sorpong Peou 2014: 212-235）。表向きには選挙が実施されているものの、実態としては与党であるカンボジア人民党が国家資源および国家機構を駆使し、政治的支配を独占する（Diamond 2002: 20-23）。政府および与党は、これら国家資源と機構を通じて支配の強化を図っており、野党に対する抑圧が顕著である。さらに、強制力、恩寵を伴う政治、メディアの統制といった手段を通じて、野党の活動は厳しく制限され、選挙は単なる支配の正当化手段に過ぎない（東島 2023: 4-8）。

カンボジアの覇権的権威主義体制は、形式的な民主的選挙を維持しながらも、与党が国家資源を独占し、抑圧的な手段で政治的競争を制限している。このような状況下で、ポピュリズムがどのように権威主義を強化し、その発展に寄与してきたのかを理解することは、カンボジアの政治構造を把握する上で不可欠である。次節では、カンボジアにおける権威主義とポピュリズムの相互関係を歴史的視点から考察する。

### カンボジアの権威主義とポピュリズム：歴史的発展と相互関係

カンボジアにおける 1970 年のロン・ノルによるクーデター（3・18 クーデター）は、深刻な社会不安を背景に発生し、国内の政治的秩序を根本から揺るがした。このクーデターの発生には、シハヌーク政権の農村政策の失敗、都市部におけるナショナリズムの高揚、外国からの介入、そして社会的分裂といっ

【表1】1953年以降のカンボジアの政権変遷と外交政策

| 期間              | 統治者                     | 政権形式       | 政治体制               | 外交傾向        | イデオロギー       | 概要                                       |
|-----------------|-------------------------|------------|--------------------|-------------|--------------|------------------------------------------|
| 1953年<br>-1970年 | ノロドム・シハヌーク              | シハヌーク政権    | 君主制(後に立憲君主制)、一党独裁制 | 中立外交        | ナショナリズム、独立主義 | 1953年にフランスから独立し、政治的中立を維持                 |
| 1970年<br>-1975年 | ロン・ノル                   | ロン・ノル政権    | 軍事独裁、軍政官僚権威主義体制    | 親米反共        | 反共、ナショナリズム   | クーデターでシハヌークを追放し、親米政権を樹立                  |
| 1975年<br>-1979年 | 波尔・ポト                   | クメール・ルージュ  | 極端共産主義の一党独裁        | 孤立主義、親中     | 極端共産主義、農本主義  | 極端な農業社会を築き、国際接触を拒否し、中国の支援に依存             |
| 1979年<br>-1989年 | ヘン・サムリン                 | カンブチア人民共和国 | 社会主義の一党独裁          | 親ベトナム、親ソ連   | 社会主義         | ベトナムの支援で成立した親ベトナム政権                      |
| 1989年<br>-1993年 | ヘン・サムリン                 | カンボジア国     | 社会主義の一党独裁          | 徐々に開放、親ベトナム | 社会主義の漸進的改革   | ベトナム撤退後、ヘン・サムリン政府は徐々に国際社会に開放             |
| 1993年<br>-現在    | ノロドム・シハモニ(名目上の国王)とフン・セン | フン・セン政権    | 立憲君主制下の権威主義体制      | 多国籍外交、親中    | 権威主義、実用主義    | 1997年のクーデターでフン・センが実権を握り、長期独裁を続け中国との関係を強化 |

出所：Chandler, David P. (2007). *A History of Cambodia*. Fourth Edition. Westview Press. pp.135-160, 160-180, 180-205, 205-220, 220-235.

Kiernan, Ben. (2002). *The Pol Pot Regime: Race, Power, and Genocide in Cambodia under the Khmer Rouge*. Yale University Press. pp.212-217. より筆者作成。

た国家内部の要因が複雑に絡み合っていたと考えられる。

1970年3月18日、ロン・ノル将軍はシハヌーク親王が外遊中である隙を突いてクーデターを執行し、シハヌークを追放して「カンボジア共和国」の成立を宣言した(Chandler 2007: 229-231)。**【表1】**に示されるように、このクーデターは1953年の独立以来、シハヌークが掲げてきた中立外交政策と一党独裁的体制の終焉を告げるものであった。この政権交代は、カンボジアの政治的安定を完全に崩壊させ、長期にわたる内戦と社会的混乱を引き起こす重要な転

換点となった。

国家レベルでの影響について述べると、シハヌーク親王の失脚後、彼は北京に亡命し、「カンプチア王国民族連合政府（GRUNK）」を樹立してロン・ノル政権への対抗姿勢を鮮明にした。一方、ロン・ノル政権はカンボジア共和国の成立を宣言したものの、国家は長期にわたる内戦と混乱の渦中に陥った。特に、1970年から1999年にかけてカンボジアは政権の頻繁な交代と権力闘争により分裂状態が続き、国家の統一が実現したのは1999年、クメール・ルージュの最後のゲリラ部隊が降伏して以降のことであった。この間、政治的不安定は国内の社会秩序を著しく損ない、国家全体に深刻かつ長期的な影響を及ぼした。

1960年代後半にかけて、シハヌーク親王の統治は次第に不安定化していった。彼が掲げた中立外交政策は、冷戦の文脈では当初賢明な選択と見なされていたものの、ベトナム戦争の拡大と国内の社会不安の深刻化により、その支持基盤が急速に揺らいでいった（Chandler 2007：150-165）。特に、1966年にシハヌークが北ベトナム軍にカンボジア東部での拠点構築（ホーチミン・ルート）を黙認し、物資輸送路として利用させたことは、アメリカや南ベトナム、さらには国内の軍部や保守派から強い反発を招いた（Chandler 2007：150-165）。この決定は、アメリカによるカンボジア東部地域への秘密爆撃作戦を引き起こすとともに、国内政治の緊張をさらに高める結果となった（Chandler 2007：155-160）。

また、1953年の独立以降、シハヌークが率いた人民社会主義社会党は政権を独占し、民主主義の導入を怠り、政治体制をプロパガンダの道具として利用していた。このような独裁的支配体制は農村部の問題を放置し、政治的緊張を増幅させる要因となった。1960年代後半、シハヌーク政権は農村問題に対して効果的な対策を講じることができず、農村部における社会的・経済的困難が深刻化していった。1967年から1968年にかけての経済的困難は、稲作の生産量の低下、灌漑設備の未整備、高利貸しによる農民の負債増加、国際的な食糧価格の変動、そして人口増加による耕地不足など、複合的な要因によって引き起こされた（Chandler 2007：155-160）。

政府はこうした状況に対し有効な政策を打ち出せなかったばかりか、農民の不満を抑制するために強硬策を選んだ。1967年3月にバットンバン州の三宝地区(Samlaut)で発生した米の強制徴収に対する農民暴動は、農村部の長年の不満が噴出した象徴的事件であった(Tully 2005: 120-122)。この暴動に対して、政府は軍を投入し、数百人の農民を殺害するなど、徹底的な弾圧を行った。この結果、農村部住民の政府への反感は一層強まり、若者たちがクメール・ルージュに加わる契機となった(Chandler 2007: 158-160)。加えて、1969年3月から始まったアメリカ軍によるカンボジア東部への秘密爆撃(Operation Menu)は、農村社会に甚大な被害をもたらした(Chandler 2007: 160-165)。この爆撃作戦は、北ベトナム軍の拠点と物流ルートを破壊する目的で実施されたが、実際には多くの民間人が犠牲となり、村々が壊滅した。爆撃による恐怖と苦難は、農村住民の反米感情と反政府感情を増幅させ、クメール・ルージュにとって格好の宣伝材料および動員手段となった(同上)。

こうした複合的な要因が積み重なり、農村部の経済的疲弊と政治的疎外感が深刻化し、シハヌーク政権の統治基盤を大きく揺るがした。

都市部においても、ナショナリストの間で、国家主権が外国勢力によって脅かされ続けていることへの不満が高まりを見せていた。シハヌーク親王は、大国との外交的バランスを通じてカンボジアの安全を確保しようと努めたが、その親北ベトナム的な姿勢は国内において激しい批判を招いた。1966年に北ベトナムへ「ホーチミン・ルート」の使用を許可したことは都市部の住民も強い反発を引き起こし、1970年3月には北ベトナム大使館に対するデモ隊の襲撃という事態にまで発展した。このように、シハヌーク政権は農村問題の解決、外国勢力の干渉排除、国内社会の分裂といった諸課題を克服できず、結果としてロン・ノルが権力を掌握し、秩序を回復するに至った。軍人出身のロン・ノルは、混乱の中で強硬な措置を講じる適任者と見なされ、その結果、クーデターを成功させるに至った。

ロン・ノル政権は、政権維持のためにナショナリズムを積極的に利用した。ロン・ノルは農村部と都市部の不満を利用し、民衆に対して強い反共主義を訴え

た。この反共主義は、農村地域に根強く存在していた共産主義への恐怖心を煽り、農民を含む幅広い層の支持を得る手段となった。さらに、ロン・ノル政権はカンボジアの伝統的価値観と宗教を強調し、「国家を守るための正義の戦い」として国民感情に訴える戦略を取った。彼は、シハヌークによる北ベトナムとの協力が国民の安全と主権を脅かしていると主張し、その結果として民衆の支持を集めることに成功した。このようなナショナリズム的アプローチは、ロン・ノル政権が急速に支持を集め、一定の政権安定を実現する上で重要な要素となった。しかし同時に、このアプローチは反対派の排除を正当化し、権威主義的な統治体制を強化する結果をもたらした。

このクーデターは、カンボジア社会全体に大きな変革をもたらした。クメール王朝時代から20世紀にかけて、カンボジアでは教育機関がほとんど存在せず、寺院で僧侶が男の子に読み書きや彫刻を教える程度であり、女の子には教育の機会すらなかった（Joel Brinkley 2014：50-52）。上座部仏教は人々に物欲の放棄と現状への満足を説き、これが社会進歩に対する意識を希薄にしていた（同上2014：50-52）。そのため、多くのカンボジア人は社会的な進歩が起こり得ないと信じており、クーデター後に植え付けられたナショナリズムは、こうした人々の素朴な性格を根本から変えてしまった。

フランスに留学した知識人たち<sup>3</sup>は、カンボジアの変革を信じ、クメール・ルーージュの指導者となったボル・ポトやキュー・サムファン（Khieu Samphan）

<sup>3</sup> フランスに留学した知識人たちは、現地で啓蒙思想や社会主義思想に触れることで、新たな政治理念や社会変革のビジョンを持ち帰った。彼らの中には、後のカンボジア政治に大きな影響を与えることになるボル・ポトやキュー・サムファンなどが含まれていた。これらの留学経験は、カンボジア国内の伝統的な価値観に対する批判と、新しい国家構築のビジョンを形成する契機となった。フランスで彼らは、西洋の近代思想に触れながら、カンボジアの植民地支配からの独立、さらには不平等の是正と農村の復興を目指す理想を抱くようになった。

こうした背景により、彼らは既存のエリート体制への反感を強め、歪曲された毛沢東主義に基づいて都市のエリート階層を否定し、農村を理想化する極端な共産主義思想に傾倒していった（パーチュット 1983：110-112）。このようなフランスでの留学経験は、後にクメール・ルーージュが掲げる極端な農本主義や反エリート主義の形成に大きな影響を及ぼしたと言える。

といった人物がその象徴であった。ロン・ノルが権力を掌握した後、社会的激動のなかでふたつの主要な動力が人々を政治生活に巻き込んだ。ひとつは外来勢力による主権侵害に対するナショナリズムの煽動であり、もうひとつは反エリート思想であった。農村部においては共産主義組織を通じて「人民を称賛し、農民を崇拜する」思想が広がり、これが反政府運動の強力な支援基盤となった。

ボル・ポトのクメール・ルージュは、農民を最も神聖で純粋な階級として位置付け、人民を動員して社会全体を改造しようとした。Wilfredによれば、「クメール・ルージュの社会では、通貨や市場といった経済的要素が一切排除され、全ての経済的刺激と社会的悪を排除したユートピア的な社会を目指していた」と述べられている (Wilfred 1989: 92)。こうした理想の下、クメール・ルージュは民族感情を巧みに利用し、最終的にロン・ノル政権を打倒して完全な支配を確立した。

総じて、1970年のクーデターは表面的にはシハヌークの政治的失策に対する糾弾であったが、実際には国内外の複雑な勢力が絡み合った結果であった。その後の内戦とクメール・ルージュの台頭は、ロン・ノル政権が国内の支持を欠き、外部の軍事的支援に依存していたことに起因している。また、クメール・ルージュの極端なイデオロギーが社会に浸透したことが、カンボジアの政治的混乱を一層深める結果となった。国際社会の介入は一時的な平和をもたらしたものの、権力構造の根本的な変革には至らず、権威主義体制が続く要因を作り出した。

#### クメール・ルージュにおけるポピュリズムとナショナリズムの交錯とその社会への影響

クメール・ルージュ (赤柬) による「赤色の嵐」は、カンボジアにおけるポピュリズムとナショナリズムが交錯した典型的な事例であった。1975年から1979年にかけて、クメール・ルージュは極端な共産主義思想を掲げてカンボジアを支配し、農業社会の理想を追求することを目的としていた。この時期、社会の純粋化と階級のない社会の建設を目指し、ポピュリズムとナショナリズムが複雑に絡み合った思想に基づいて統治が行われた。

ボル・ポトは社会主義国家の建設という教条的な方針を掲げ、革命の過程で農民崇拜やエリート排除、反現代化の思想を推し進めた。その結果、クメール・ルージュの思想は内部で対立や分裂が生じ、農民崇拜とエリート排除という、相反するイデオロギーが絡み合う独自の文化的脈絡を形成することとなった。反米帝国主義を掲げながらも共産主義ベトナムとの対立を強調するなど、一貫性に欠ける複雑な状況が見られた。

クメール・ルージュの運動は、「真の人民」を代表することを強調し、この「真の人民」とは特に農村部の農民を指した。都市のエリートや知識人は「汚染された異分子」として排除される対象とされた (Chandler 1999 : 102-104)。農民の理想化とエリートの排除はポピュリズムの典型的な特徴であり、都市部のエリートを敵視することで農業社会への転換を目指した (Kiernan 2002 : 212-217)。ボル・ポト政権は「腐敗したエリート」との断絶を強調し、ロン・ノル政権に対する農村部の民衆の不満を取り込み、その支持を得ることに成功した (Hinton 2005 : 134-137)。このポピュリズム的手法は極端な共産主義イデオロギーと結びつき、社会浄化と異分子の排除を正当化する手段として用いられ、カンボジア社会に深い傷跡を残した。

クメール・ルージュのポピュリズムにおいて、農民は純朴で腐敗から遠ざかった「真の人民」として理想化された。これに対して都市のエリートは、社会の腐敗と不平等の原因として描かれた。この対立軸により、ポピュリズムは農民層の支持を得ることに成功したが、同時に都市社会との分断を深め、カンボジア社会全体の不安定化を招くこととなった (Mudde 2004 : 23-25)。このように、ポピュリズムがカンボジアに与えた影響は、単にエリート批判にとどまらず、社会全体の構造に大きな変化をもたらした (Chandler 1999 : 102-104)。このような強制移住と集団農業は、都市と農村という2つの社会階層の対立をさらに悪化させ、都市部からの反発を引き起こす結果となった。

一方で、クメール・ルージュのナショナリズムはカンボジアの伝統文化の強調や外部勢力への敵意として表れた。特に、外部の帝国主義勢力、特にアメリカへの反感やベトナムに対する敵対感情が強調された (Heywood 2003 : 94-87)。

クメール・ルージュのナショナリズムは一貫性に欠けており、例えばアメリカやベトナムに反対しながらも、伝統文化を復興しようとする矛盾した姿勢を示した。このような態度が内部でのイデオロギーの対立と矛盾を引き起こし、結果として社会全体の不安定化をもたらした。

ポピュリズムとナショナリズムは、クメール・ルージュの運動において異なる役割を果たしていた。ポピュリズムは農民を「真の人民」と位置づけ、エリートを排除することでその支持を集めた。この過程で強調されたのは「真の人民」の利益を守るという正義感であり、エリートに対する批判と対立がその原動力となった。一方で、ナショナリズムはカンボジアの独立と対外的干渉への反対を通じて内部の団結を図り、正当性を高めようとした。しかし、ポピュリズムとナショナリズムの要素が混ざり合うことで政策は極端化し、不安定さが増していった。ポピュリズムによるエリート排除とナショナリズムによる外部勢力への敵意が合わさった結果、社会はますます孤立し、最終的には社会全体の分裂と悲劇的な結末を迎えることとなった。さらに、クメール・ルージュの運動にはナショナリズムや伝統的な王権への懷古主義が入り混じっていた点も注目に値する。波尔・ポト政権はクメール王朝時代の繁栄を理想化し、過去の王権の復権に一定の関心を持ちながらも、それを共産主義体制に置き換えようとした矛盾した態度を示していた。波尔・ポト自身も農民家庭の出身であり、農業社会への回帰と現代化の排斥を目指していたが、王権は共産党に取って代わられるべきだと考えていた。この「プロレタリア独裁」への追求は、暴力的なナショナリズムの利用と共に権威主義的な体制を打ち立てることを目指したが、効果的な政治的制衡を欠き、最終的には独裁的な統治へと至った。

#### ポピュリズムとナショナリズムの手法と現代社会への示唆

波尔・ポト政権の下で、農村部の農民は「革命の主体」として持ち上げられ、都市エリートや知識人は「反革命的要素」として扱われた。このような対立は、単なる社会階層の違いを超え、国家全体の統治構造を揺るがす結果となった。特に、都市部から農村部への強制移住政策は、都市と農村の対立をさらに激化さ

せ、都市社会に対する不信感を助長した。また、教育を受けた知識人層の排除により、国家の知的資源が大幅に失われ、長期的な社会発展の基盤が損なわれる結果となった。このように、クメール・ルージュの運動におけるポピュリズムとナショナリズムの相互作用は、その矛盾と破壊的な力を具現化した（ミュラー 2017：42-49）。この経験は、異なるイデオロギーがどのように相互作用し、その結果どのような政治的影響をもたらすかを理解する上で重要であり、現代のポピュリズム運動にも示唆を与えるものである。

ポピュリズムは「人民」と「エリート」の対立を強調する政治手法であり、クメール・ルージュにおいては「農民の利益を守る」という大義名分の下で都市の知識人やエリートを排除する形で実行された。この排他性は農村の民衆を動員する強力な手段となったが、同時に社会の分断を深め、最終的には権力の集中を招いた。

ミュラーもまた、ポピュリズムの反多元主義的な性格が民主主義の基盤を脅かすリスクについて指摘している（ミュラー 2017：123-126）。クメール・ルージュの事例は、この排他性がどのように社会に作用し、権力の集中や異分子排除を通じて民主主義の抑圧に繋がったかを理解する上で重要である（Kaltwasser 2017：125-128）。水島は、ポピュリズムが「解放の論理」として機能し得ることを強調し、既存のエリートに対抗して民衆の声を代表する側面があると述べている。例えば、2010年代の欧州におけるポピュリスト運動は、既存の政治エリートへの批判を強め、一般市民の声を直接反映させることを目指した。こうした運動はエリート主導の政策決定に対する不満を吸収し、政治的な変革を促進する役割を果たしたが、一方で異なる意見や集団を排除し、民主主義の基盤である多様性を脅かすリスクも伴っていた（水島 2014：8-10, 23）。この観点からも、クメール・ルージュの教訓は、現代におけるポピュリズム運動のリスクを理解するための重要な示唆を提供している。

加えて、クメール・ルージュのポピュリズムは、農民を特別視することで都市部の住民を敵対視し、社会の分裂をさらに深めた。農村を「真の人民」とし、都市部の住民を「汚染された異分子」とすることで、都市と農村の対立は深刻

化した。ポピュリズムは本来、民衆の意志を反映させるというポジティブな側面を持ち得るものであるが、クメール・ルージュのような極端な場合には、その排外性が強調され、社会全体の調和を破壊する結果となった（Huntington 1994：309-311）。クメール・ルージュのナショナリズムは、民族的な純粋さを強調し、外部からの影響を排除することで国家の独立を維持しようとした。このナショナリズムの背景には、長年にわたる外部勢力による支配や干渉への反発があった。特にフランスの植民地支配やベトナムとの歴史的な対立が、クメール・ルージュのナショナリズムの根底にあった。彼らはカンボジアの独立と民族的誇りを守るという名目で、国内の「敵」と見なされた集団を排除することで、社会の純化を図った。しかし、これは実際には国民の分断と大量虐殺という悲劇を引き起こす結果となった。

ポピュリズムとナショナリズムの要素が複雑に絡み合う中で、クメール・ルージュは次第に権力を集中させ、他の政治的選択肢を排除していった（Kiernan 2002：212-217）。また、農業社会への回帰という理念に基づく経済政策は、急進的で非現実的なものであり、多くの国民が飢餓と過酷な労働に苦しむ結果となった。このような経済政策の失敗も、クメール・ルージュ政権の崩壊に拍車をかけた。現代においても、ポピュリズムとナショナリズムの結びつきは多くの国で見られる現象であり、政治的な不安定要素として機能することがある。例えば、欧州の右派ポピュリスト政党やアメリカの一部の政治運動では、移民やエリートに対する反感が強調され、ナショナリズム的なスローガンが利用されている。これらの運動は、一時的に民衆の支持を集めることに成功しているが、その排外性と排他性が社会の分断を深め、長期的には民主主義の基盤を脅かすリスクを伴っている。クメール・ルージュの例は、そのようなイデオロギーの結合がもたらすリスクを示しており、これを教訓として、現代社会におけるポピュリズムとナショナリズムの台頭に対する警戒心を持つ必要があると言える。

以上のように、クメール・ルージュの運動に見られるポピュリズムとナショナリズムの相互作用は、単なる歴史的な出来事にとどまらず、現代における政治的な現象を理解する上で重要な視点を提供するものである。政治的なイデオ

ロギーが持つ多様な側面と、それがもたらす可能性のある結果について深く考察することで、より健全な社会の形成に向けた示唆を得ることができるであろう。クメール・ルージュの事例を通じて、ポピュリズムとナショナリズムがどのように政治的に利用され、社会にどのような影響を及ぼすかを理解することは、現代の政治動向を読み解く上で非常に重要である。特に、急進的な思想が民衆の不満を吸収し、独裁的な体制に繋がるプロセスを理解することで、民主主義社会が直面するリスクとその防止策についての洞察を得ることができる。このような教訓は、現代における政治的極端主義や排外的ナショナリズムに対抗するための指針となりうるものである。

また、ポピュリズムとナショナリズムが同時に強調されるとき、その社会への影響は非常に深刻である。ポピュリズムは、一見すると民衆の声を代弁し、エリートに対する反発として機能するが、その裏には単純化された「善と悪」の構図が存在し、複雑な社会問題を解決するどころかさらに対立を深めることがある。クメール・ルージュの運動では、エリート排除と民族的純化が一体となり、結果としてカンボジア社会の全ての側面に破壊的な影響を及ぼした。

これまでの分析から明らかになるのは、ポピュリズムには2つの主要な側面が浮かび上がる。ひとつは、「人民の声」を代弁し、既存の政治秩序に挑戦することで社会の変革を促進する側面であり、これはポジティブな意味での「解放の論理」である。具体的には、例えば19世紀末のロシアにおけるナロードニキ運動や、20世紀の中国における土地改革などが挙げられ、これらは既存のエリート支配に対抗し、民衆の政治参加を促すことを目指した。具体的には、既存のエリート支配を打破し、民衆が政治参加を通じて自己決定を実現することを目指す点が挙げられる。このような「解放の論理」は、特に社会的不平等に対する批判と、政治権力の再分配を通じた民衆の権利回復を目指す運動で強調される。

もうひとつは、その排他性と反多元主義により、異なる意見や集団を排除し、権威主義に変質することで民主主義を抑圧する側面である。クメール・ルージュの運動は、この両方の側面を示しており、エリート批判を通じた一時的な支持

の獲得と、異分子の排除による権力の集中という矛盾したプロセスを経験した。

したがって、ポピュリズムは多様かつ矛盾する性質を備えた政治現象であり、その力学は文脈によって異なる影響を及ぼすことが理解される。クメール・ルージュの事例は、ポピュリズムが持つ解放的な可能性と、それが抑圧的な権威主義へと転じるリスクの双方を示す典型例である。現代社会におけるポピュリズムの重要性は、この2面性をいかに理解し、制御するかにかかっていると言える。この理解を通じて、ポピュリズムの魅力と危険性を包括的に捉え、民主主義に対するその潜在的な影響を評価することが可能となる。ポピュリストはしばしば自身を「人民の集団的利益」を代表する存在として位置付けられる。たとえば、ハンガリーのヴィクトル・オルバンやトルコのレジェップ・タイイップ・エルドアンは、自らを「真の人民」の代表として位置づけ、エリート層を批判することで支持を集めている。しかし、精緻に検証すると、ポピュリストが重視しているのは、実際に公共の意見形成の過程を経て、常識を持つ誰もが導き出すことのできる公共の利益ではなく、「真正なる人民」の象徴的な表現を通じて推測される「正しい」政策であることが明らかとなる。このようにして、ポピュリストは現実の経験に基づく批判を免れることができるのである。ポピュリストは常に「真正なる人民」や「沈黙する多数派」を掲げ、民選代表や選挙によって選ばれた公式な結果に対抗しようとする。

この節では、クメール・ルージュによるカンボジア支配を通じて、ポピュリズム、ナショナリズムと権威主義の複雑な相互関係を考察した。クメール・ルージュは「真の人民」を農民として理想化し、都市エリートを排除することにより、ナショナリズム的な支持基盤を構築した。しかし、その結果、権力の集中と異分子の排除という形で権威主義的な体制へと変質し、社会の抑圧が顕著となった。この分析から、ナショナリズムは一方でエリートへの反発を通じた社会の変革を促進するが、他方で排他的な政治手法によって権威主義的な傾向を強める可能性があることが示された。このことは、ナショナリズムが持つ解放と抑圧の2面性を理解し、現代社会におけるその影響を慎重に評価する必要性を強調している。

### カンボジアにおける反ベトナム感情と救国党の台頭

1990年代のUNTACによる占領期に、反ベトナム的なナショナリズム的感情が再燃し、カンボジア社会に深く根ざした反ベトナム感情が改めて注目されることとなった。この時期、クメール・ルーージュのゲリラ部隊やフンシンベック党をはじめとする複数の政治勢力は、カンボジアに居住するベトナム人に対し、さまざまな程度の差別や迫害を行い、「ベトナムはカンボジアへの侵略を決して放棄していない」との主張を掲げた（Ehrentraut 2013: 78）。クメール帝国の衰退期以降、アンナンの侵攻を契機とする長年の反ベトナム感情は、カンボジアにおける国内政治の主要な議題となり、歴代の政治指導者にも多大な影響を与えてきた。歴史学者らは、カンボジアの民族感情は気まぐれで変わりやすく、それがロン・ノル政権やボル・ポトといった指導者たちの政治方針を半世紀以上にわたって左右してきたと指摘している（Chandler 2009: 288；バーチェット 1983: 124-127）。

1979年のベトナムによるカンボジア侵攻と占領は、現代における憎悪の連鎖をさらに深め、カンボジア社会に反ベトナム感情が根強く残る結果となった。この感情は、選挙時の主要な政治的議題や動員の手段として利用され、特にサム・ランシー<sup>4</sup>や救国党（CNRP）のようなカリスマ的な指導者によって強調されている。ポピュリズムは、このようなエリート批判と「真の人民」として理想化された農民や労働者への訴えを通じて、カンボジアの権威主義体制に対抗す

<sup>4</sup> サム・ランシー（Sam Rainsy）は、カンボジアの著名な政治家であり反対派の指導者である。1992年にサム・ランシーはフンシンベック党に加入し、翌年にシェムリアップ州の国会議員に当選、1993年には経済・財務大臣に就任した。しかし党内の指導層との意見の不一致により、1995年に大臣職を解任され、党を除名された。その後、彼はカンボジア国民党を設立し、1998年に「サム・ランシー党」と改名した。2012年には、サム・ランシー党と人権党が合併し、カンボジア救国党を設立、サム・ランシーが党首に就任した（Brinkley 2014: 144-155）。

救国党の指導者として、サム・ランシーは与党であるカンボジア人民党を度々批判し、腐敗や人権侵害を指摘してきた。彼は名誉毀損や公文書偽造の罪で何度も告訴され、不在のまま有罪判決を受けている。2015年には国外へ亡命し、2017年には救国党の党首を辞任した。2018年、フランスでカンボジア救国運動を設立し、自らその代表に就任した。2021年3月、カンボジアの裁判所はサム・ランシーに対し、反逆罪で不在のまま25年の禁錮刑を言い渡し、選挙権と被選挙権を剥奪した。

【表2】1993年-2023年の制憲議会選挙・総選挙の結果

|         | カンボジア<br>人民党<br>(CPP) | フンシン<br>ベック党 | サム・ランシー党 (SRP) ・<br>カンボジア救国党 (CNRP) | その他の<br>政党 |
|---------|-----------------------|--------------|-------------------------------------|------------|
| 1993年5月 | 51                    | 58           | 未成立                                 | 14         |
| 1998年7月 | 64                    | 43           | 15                                  | 1          |
| 2003年7月 | 73                    | 26           | 24                                  | 10         |
| 2008年7月 | 90                    | 2            | 26                                  | 7          |
| 2013年7月 | 68                    | 0            | 55                                  | 2          |
| 2018年7月 | 125                   | 0            | 解散された                               | /          |
| 2023年7月 | 120                   | /            | /                                   | /          |

\* 共同首相制の廃止は1999年3月の憲法改正による。

出所：カンボジア国民選挙委員会 (National Election Committee of Cambodia)  
<https://www.nec.gov.kh/english/> より筆者作成。

る政治的手段として浮上した。そのため、ポピュリズムの選挙政治に対する影響を理解することは、カンボジアの政治的安定と不安定の要因を見極める上で不可欠である。

【表2】は、1993年以降のカンボジアの制憲議会および総選挙における各政党の議席数の推移を示している。カンボジア人民党は、全期間を通じて影響力を強め、特に2008年以降、圧倒的な多数を獲得して一貫した権力の掌握を果たしている。一方、フンシンベック党は1993年の選挙で最多議席を獲得したものの、その後急速に勢力を失い、2013年以降は議席を獲得することができなくなった。サム・ランシー党 (SRP) は1995年に創設され、2013年には救国党 (CNRP) と合併して55議席を獲得するまでに成長を遂げたが、2018年に解散を命じられ、その影響力は劇的に低下した。こうした選挙結果は、権威主義体制が反体制勢力に対する抑圧を強化し、同時にポピュリズムの根強い支持基盤を示すものである。

こうして反ベトナム感情を背景に成長した救国党は、選挙戦においてポピュリズムを活用し、民衆の支持を集めていくことになった。その具体的な戦略と影響について、次に詳しく見ていく。

### 救国党のポピュリズム戦略とその影響

クメール・ルージュのポピュリズムは、暴政と戦争の中で一時的に沈黙したものの、1990年代以降、新たな形で再び台頭した。その特徴は、選挙戦において民衆を動員するという形で現れ、選挙が権力獲得の主要な手段となった。「投票」は「人民」と「他者」<sup>5</sup>の対立を象徴する重要な武器とみなされ、結果としてポピュリズムは選挙の中で勢力を増していった（Morgenbesser 2014：29-31）。特に象徴的なのは、サム・ランシー党の台頭である。2013年の第5回全国選挙では、カンボジア救国党（Cambodia National Rescue Party, CNRP）が55議席を獲得し、フン・セン政権に対抗する勢力として強い存在感を示した。さらに、選挙に関連する投票率や有権者数といったデータを考慮することで、各政党の議席数の変動をより深く分析することが可能となる。例えば、2013年の選挙では投票率が69%を超え、野党勢力が大幅に勢力を拡大したことが確認されている。

表3からわかるように、各政党が掲げた主要な政策テーマとスローガンもポピュリズムの勢力拡大を理解する上で非常に重要である。例えば、救国党は「民主主義の回復」や「腐敗撲滅」を主要な政策テーマとし、「人民のための政治」「国民のための正義」「自由な選挙を求める戦い」などのスローガンを掲げた（Brinkley 2014：152）。これにより、エリート支配に対する強い批判と、民衆の声を反映させるという姿勢を強調している。また、「圧政を打倒せよ」「人民の声を無視するな」といったスローガンを通じて、体制に対する明確な反対を示し、民衆の間に不満を喚起しながら政治的支持を集める戦略を取っていた。一方、フン・セン政権は「安定と成長」を強調し、「カンボジアの未来を守る」「国家の安全と繁栄の維持」「社会の調和を実現する」といったスローガンで支持を呼びかけた（Morgenbesser 2014：30-31）。さらに、「国民の安全保障」「経済発展の持続」を通じて、安定した統治と持続的な経済発展を前面に押し出すことで、国民の安心感を引き出すことに成功していた。これらのスローガンは、国

<sup>5</sup> ここでの「他者」は都市エリートや現体制支持者など。

【表 3】カンボジアの主要政党とスローガンの変遷（1990 年代以降）

| 年代        | 政党名       | 主要なスローガン                      |
|-----------|-----------|-------------------------------|
| 1990 年代以降 | 救国党（CNRP） | 「民主主義の回復」「腐敗撲滅」「人民のための政治」     |
|           | 人民党（CPP）  | 「安定と成長」「カンボジアの未来を守る」          |
|           | 救国党       | 「正義のための戦い」「公正な選挙の実現」「市民の声を聞け」 |
| 2000 年代以降 | 人民党       | 「国民の安全保障」「経済発展の持続」「社会の調和を保つ」  |
| 2013 年    | 救国党       | 「圧政を打倒せよ」「人民の声を無視するな」         |
| 2017 年    | 人民党       | 「国家の安定を守るための断固たる決意」           |
|           | 救国党       | 「人民の勝利を目指して」「独立と民主のための戦い」     |

出所：Brinkley, Joel. (2014). *Cambodia's Curse: The Modern History of a Troubled Land*. PublicAffairs, pp.144-155.

Chandler, David P. (2007). *A History of Cambodia*. 4th edition. Westview Press, pp. 229-231. Morgenbesser, Lee. (2014). *Beyond the Facade: Elections Under Authoritarianism in Southeast Asia*. SUNY Press, pp.29-31. より筆者作成。

家の安定を最優先とする政策の正当性を強調し、反対勢力に対抗する姿勢を示している。

カンボジア救国党は、カンボジアにおける民主化運動の重要な勢力であり、西洋社会からは民主的な転換の鍵のひとつと見なされている。一方、救国党が民主化を追求する過程で、反ベトナム的なポピュリズムもその勢力を支える要因となってきた。特にその指導者であるサム・ランシーは、フン・センをベトナムの傀儡であると度々非難し、人民党およびフン・センを批判する際、排外主義や扇動的な言葉を用いることが多く、特に若い世代の間で広く支持を得ている。その支持の中には、極端なナショナリズムの要素も含まれている<sup>6</sup>。

救国党内部には民主化を求める声がありながらも、同時にポピュリズムの特

<sup>6</sup> <https://doi.org/10.1355/9789814620598-009>  
Kheang Un (2015) *The Cambodian People Have Spoken Has the Cambodian People's Party Heard?* より引用、2024 年 11 月 14 日にアクセス。

徴も見受けられる。ポピュリズムは、その大衆動員力において民主化への欲求を凌駕する力を有し、これら2つの側面が結びつくことで権威主義体制に対して顕著な挑戦をもたらしている。サム・ランシーは、民主化推進者であると同時にポピュリズム運動の扇動者という2重の役割を果たしており、救国党がポピュリズム運動を主導し権威主義体制に挑む際には、特にカリスマ的リーダーの存在が重要な意味を持つ。ポピュリズム運動には民主化の要素が多分に含まれており、これら2つが権威に対抗する過程で相互に融合する様子は、カンボジアにおいて特に顕著である。サム・ランシーは人民党に対する最も強力な反対者として認識されており、フン・センに直接対峙することを恐れない数少ない政治家である。

カンボジア人民党は長期にわたり国家資源を掌握し続けた結果、政治、経済、社会の各問題の改善が滞り、反対勢力の活動余地が生じている。サム・ランシーは一貫して政治的自由や人権の保障といった西洋的価値観を強調し、フン・セン政権が権力者との癒着を通じて人民を搾取し、土地を奪い、貧富の格差を拡大していると激しく批判した。そして、救国党としての改革推進に対する強い決意を表明している。この立場は特に都市部の若年層有権者から強い支持を得ており、第5回全国選挙では、若者層を中心に変革を求める声が高まり、フン・セン政権への不満が顕著に表れた。

加えて、救国党はナショナリズムを伴うポピュリズム感情を巧みに利用し、特に反ベトナム感情の喚起においてその手腕が際立っている。彼らは「フン・セン政権と人民党はベトナムの傀儡であり、ベトナムの利益のみを追求している。プノンペンも依然としてハノイの支配下にある」（邢 2008：266-288）という主張を繰り返し、有権者に強い影響を与えてきた。一方、フン・センもベトナムとの友好関係を隠すことなく、「ベトナム軍がカンボジアを救い、ポル・ポト政権のジェノサイドを打倒したことは誇りである」と述べている（同上 2008：288）。1979年の歴史認識の違いは社会に大きな亀裂を生み、2013年の選挙では救国党が反ベトナム感情を持つ有権者からの支持を集めることに成功した。

反人民党および反ベトナムの議題は、現代において自然資源の破壊という現

実と結びついている。北イリノイ大学のカンボジア問題専門家である Kheang Un は、2013 年選挙の成敗の鍵について、「人々は政府が経済的な特権の名の下に国家の豊かな土地を譲渡することを懸念しており、その土地はしばしばベトナム企業に売られている。これにより、救国党は農民や村民から土地を奪う事例を、隣国によるカンボジアの自然資源の大規模な略奪に反対する広範な議題に変えることができた」(Kheang Un 2019: 123-125) と分析している。救国党は土地問題に対する不満と反ベトナム感情を結びつけ、多くの有権者の支持を引き出すことに成功した。2013 年の選挙でカンボジア救国党は顕著な成果を収め、ポピュリズムの戦略を通じて、特に社会経済的地位が低い中下層市民を中心に、多くの有権者を引きつけた。この選挙は、救国党がポピュリズムを活用し、市民の不満を如何に引き出したかを示す重要な事例である。

民主主義の観点から見ると、右翼的ポピュリズムは一定の脅威を孕んでいる。東南アジアにおける右翼ポピュリズムの台頭は、伝統的な政治エリートの排除を進行させてきた。東南アジア研究者であるヴァナリス・チェアン (Vannarith Chheang) は、救国党の多面的なポピュリズム選挙戦術が世界的なポピュリズムの潮流の中で際立っていることを指摘し、「2013 年の選挙以降、カンボジアにおいてポピュリズムは絶えず拡大を続け、救国党のポピュリズム政策は主に反体制と政治変革に焦点を当てている」<sup>7</sup> と述べている。以下では、救国党がどのようにポピュリズムを利用し、多くの議席を獲得したのかを分析する。

まず、救国党は伝統的な政治エリートに対する市民の強い不満を巧みに利用した。特に、カンボジア人民党の汚職・腐敗や土地収用、権力者との癒着といった問題による負のイメージを利用した。Morgenbesser は、救国党が選挙活動で「反汚職」を繰り返し訴えることで、自らを「人民の代表」として位置づけ、人民党との鮮明な対比を作り出したと指摘している (Morgenbesser 2016: 158-171)。汚職に反対しエリートを排斥するというナラティブは、一般市民の共感

<sup>7</sup> Chheang Vannarith (2017) 「The world-wide rise of populism」, *The Khmer Times* <https://www.khmertimeskh.com/12491/the-world-wide-rise-of-populism/> より引用、2024 年 11 月 25 日アクセス。

を効果的に引き出し、ポピュリズム政治の重要な特徴を顕在化させた。

次に、救国党は社会経済的不平等に関心を示すことで、多くの低所得層の有権者を引きつけた。Strangio は、カンボジアの経済成長が顕著であったにもかかわらず、大多数の市民にはその恩恵が及ばず、貧富の格差が依然として深刻であり、資源配分の不公平が続いていると述べている。救国党は土地権利の保護や農村の発展を訴え、人民の利益を国家の経済エリートや外国投資家の利益よりも優先することを強調した (Strangio 2014 : 151-153)。このようなナラティブは基層の有権者の日常的なニーズに結びついており、救国党はこれにより社会的不満を選挙での支持に転換することに成功した。

また、救国党はナショナリズムとポピュリズムを結びつけ、ナショナリズムの感情を煽ることで有権者を引きつけた。Kheang Un は、救国党がカンボジアとベトナムとの歴史的な争いおよび領土問題を利用し、市民の対ベトナム感情を煽り、人民党がベトナム問題において弱腰であると批判し、さらにはベトナムと癒着しているとまで主張したと指摘する (Kheang Un 2019 : 123-135)。このようなナショナリズムの感情は、特にベトナムに対して敵意を抱く農村部の有権者を効果的に引きつけ、救国党の支持基盤を強化した。ナショナリズムは感情的な動員手段として、救国党のポピュリズム的なナラティブをさらに浸透させる役割を果たした。

最後に、救国党はソーシャルメディアの活用にも成功し、それが選挙での成果に重要な役割を果たした。Sokhan の研究によれば、伝統的なメディアは長らく人民党の厳しい管理下にあったが、救国党はソーシャルメディア（特に Facebook）を通じて有権者と直接的にコミュニケーションを取り、反汚職・反エリートのメッセージを若者層に広く伝えた。若年層の有権者は社会状況に対して広く不満を抱いており、救国党はソーシャルメディアを通じて従来の情報独占を打破し、これらの有権者の政治参加を促した (Sereyvisith Sokhan 2015: 9-10)。その結果、不満を選挙での支持に結びつけることに成功した。

総じて言えば、カンボジア救国党は 2013 年の選挙において、伝統的エリートへの反発、社会経済的な不正への関心、ナショナリズムの感情の喚起、ソー

シャルメディアの効果的な利用といったポピュリズム的な戦略を通じて、広範な市民の支持を得ることに成功した。これらの戦略は、救国党が社会底辺層の有権者の不満を引き出し、選挙での大きな成功を収める助けとなった。この現象は、特定の政治的および社会的背景において、ポピュリズムが伝統的な権力構造に対抗する効果的な動員手段であることを示している。

## おわりに

現代カンボジアにおける権威主義とポピュリズムの相互作用は、1970年代から今日に至るまでの権力構造の変遷において極めて重要な役割を果たしてきた。本研究では、ロン・ノル政権からクメール・ルージュ、ヘン・サムリン政権、フン・セン政権に至るまで、権威主義体制が武力や外的要因に依存して再構築されてきた過程を明らかにし、一方でポピュリズムがカリスマの指導者を通じて民衆を動員し、その影響力を拡大してきたことを示した。特に、権威主義とポピュリズムがどのように共存し、相互に影響を与え合ってきたかを検証することで、カンボジアの政治的ダイナミクスを深く理解することを目指した。

救国党の台頭とその後の解散は、カンボジア政治における権威主義とポピュリズムの緊張関係を象徴しており、民主化の可能性と限界を示している。このような権威主義とポピュリズムの力学は、カンボジアの政治的安定と不安定の両面に寄与しており、今後も多くの課題を内包し続けるだろう。本研究は、こうした力学の中で、カンボジアの権威主義体制とポピュリズムがどのように共存し、対立してきたか、その歴史的背景と現在の政治的力学について新たな知見を提供し、東南アジア全域の政治現象を理解するための有益な枠組みを提示している。

今後の研究では、デジタル技術の発展や国際社会からの影響がカンボジアの政治にどのような変容をもたらすかを詳細に考察する必要がある。特に、デジタル技術がポピュリズムの動員手段として利用され、権威主義体制を支える、または挑戦する要素となるかを検討することが重要である。また、国際社会の援助政策や外交関係がカンボジアの権威主義体制に与える影響も具体的に分析す

ることが求められる。さらに、権威主義とポピュリズムの相互作用が民衆の日常生活や国家の発展、国際関係に与える影響についても考察を深めるべきである。このような研究を通じて、カンボジアにおける権威主義とポピュリズムの関係をより包括的に理解し、持続可能な政治発展への示唆を得ることが期待される。

(参考文献)

英文文献：

- Brinkley, Joel (2014). *Cambodia's Curse: The Modern History of a Troubled Land*. PublicAffairs, pp. 51-52, 144-155.
- Chandler, David Porter (1999). *Brother Number One: A Political Biography of Pol Pot*. Silkworm Books, pp. 102-104.
- Chandler, David Porter (2007). *A History of Cambodia* (4th ed.). Westview Press, pp.135-160, 160-180, 180-205, 205-220, 220-235.
- Cristóbal Rovira Kaltwasser (2017). *Populism in Europe and the Americas: Threat or Corrective for Democracy?*. Cambridge University Press, pp. 125-130.
- Chheang, Vannarith (2017). The world-wide rise of populism. *The Khmer Times*.
- Diamond, Larry Jay (2002). Thinking about hybrid regimes. *Journal of Democracy*, 13 (2), pp. 20-35.
- Heywood, Andrew (2003). *Political Ideologies: An Introduction*. Palgrave Macmillan, pp. 94-87.
- Hinton, Alexander Laban (2005). *Why Did They Kill?: Cambodia in the Shadow of Genocide*. University of California Press, pp. 134-137.
- Huntington, Samuel Phillips (1991). *The Third Wave: Democratization in the Late Twentieth Century*. University of Oklahoma Press, pp. 11-14.
- Huntington, Samuel Phillips (1994). *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*. Simon & Schuster, pp. 309-311.
- Kheang, Un (2019). The politics of patronage and power in Cambodia. *Asian Journal of Comparative Politics*, 4 (2), pp. 17, pp. 123-135.
- Kiernan, Ben (2002). *The Pol Pot Regime: Race, Power, and Genocide in Cambodia under the Khmer Rouge, 1975-79*. Yale University Press, pp. 215-218.

- Kiernan, Ben (2004). *How Pol Pot Came to Power: Colonialism, Nationalism, and Communism in Cambodia, 1930–1975*. Yale University Press, pp. 158-162, 370-372.
- Linz, Juan José (2000). *Totalitarian and Authoritarian Regimes*. Lynne Rienner Publishers, pp. 264-266.
- Morgenbesser, Lee (2014). *Beyond the Facade: Elections Under Authoritarianism in Southeast Asia*. SUNY Press, pp. 29-31.
- Morgenbesser, Lee (2016). Cambodia's transition to hegemonic authoritarianism. *Journal of Democracy*, 27 (1), 158-171.
- Mudde, Cas (2004). The populist zeitgeist. *Government and Opposition*, 39 (4), 541-563.
- Peou, Sorpong (2014). *Cambodia's Peace Process: At the Crossroads*. Institute of Southeast Asian Studies, pp. 212-235.
- Sokhan, Sereyvisith (2015). Social media and its political impact: A case study of Cambodia 2013 election (Master's thesis). Malmo University, pp. 9-10.
- Strangio, Sebastian (2014). *Hun Sen's Cambodia*. Yale University Press, pp. 151-153.
- Tully, John (2005). *A Short History of Cambodia: From Empire to Survival*. Allen & Unwin, pp. 120-122.
- Wilfred, Beresford (1989). The economics of Cambodia under the Khmer Rouge. *Journal of Asian Studies*, 48 (2), pp.110.
- 日本語：
- 東島雅昌 (2023) 『民主主義を装う権威主義：世界化する選挙独裁とその論理』千倉書房。
- 山田裕史・新谷春乃 (2023) 「安定的な世襲の実現に向けて——2023年カンボジア総選挙」、『IDE スクエア』、日本貿易振興機構アジア経済研究所。
- 水島治郎 (2016) 『ポピュリズムとは何か』中央公論新社。
- 水島治郎 (2024) 「アジアの「民主主義—欧亜比較の観点から—」『アジアの「民主主義」の行方 —政治秩序の溶解と拡大するポピュリズム政治—』公益財団法人 NIRA 総合研究開発機構。
- 木之内秀彦 (2008) 「カンボジアの「ストロングマン」—民主化時代の権威主義を考える—」、島田幸典 木村幹編著 (2008) 『ポピュリズム・民主主義・政治指導 制

度的変動期の比較政治学』ミネルヴァ書房。

ヤン＝ヴェルナー・ミュラー（2017）著、板橋拓己（翻訳）『ポピュリズムとは何か』、岩波書店。

中国語：

邢和平（2008）『フン・セン時代—The Era of Hun Sen』、カンボジア Luck Star 出版社。

蕭文軒、顧長永、林文斌（2020）『柬埔寨的政治經濟變遷 1953-2018』聯經出版。

（ちん こん）

（2025 年 2 月 22 日受理）